

農業から男女共同参画を考える

県農村生活アドバイザー、さんかく21・安城などを通して男女共同参画を推進。
平成19年度男女共同参画推進活動者表彰を受賞。



石川政子さん(福釜町)

きつかけは何気ない一言から岡崎の電報電話局に勤めていたが、結婚を機に退職。送別会で上司に「なんだあ、お前、百姓に嫁に行くのか」と言われ、農村女性の地位の低さを感じ、とても悔しい思いをしたのです。そして「こんな思いをする女性はいただけにしたい」と、そう感じたのが、わたしの活動の原点です。

農業でも休みを

オイルショックのころ、物価上昇が激しく、節約のため、自分たちで温室建設に取り組んでいました。朝、交わされる言葉は「おはよう」ではなく、「疲れたね、くたびれたね」。これではいけないと感じ、農業でも休みをとろう」を目標として結成したのが「カトリア生活改善実行グループ」です。当初は、安城農業改良普及所現安城農

業改良普及課)で勉強会を開催してもらう、それに出席することが休みの代わり、という感じでした。しかし、目標は「本当の休み」を作ること。でも、口で「休みが欲しい」というだけでは、実際に何か行動を起こさなければいけません。そこで、今度は「休みの日にはスカートをはこう運動」を始めました。活動を通し、だんだん、休みをとることが当たり前になっていきました。

家族経営協定を結び

県の農村生活アドバイザーに認定され、まず始めたのが家族経営協定の締結推進です。家族経営協定とは、農業経営者(夫)と世帯員(妻や子)の間で、自分の仕事(役割)や労働時間、報酬を決めて文書で締結するというもの。しかし、当初は「そんなことを今さら文書にしなくても」という声も。そこで、農村生活アドバイザーの仲間と「おとめ座」という劇団を作り、家族経営協定を分かりやすく説明する寸劇を行いました。寸劇にすることで、見る人はもちろん、演じている自分たち自身も勉強になったと思います。今では、市内で約50件が協定を結びました。他市と比べて、比較的多い件数です。もともと安城市は農業先進地でもあり、理解される土壌があったのかもかもしれません。

農業を大切に

鉢花生産農家として、夫とともに経営に参画する中、わたしはハンギングバスケットなど消費者部門を担当。平成14年には、安城市初の女性農業委員に選ばれ、現在では、愛知県農業会議常任会議員となりました。農業への理解を広めるため、講演や紙芝居を通して、家族経営協定の推進や食育活動を行っています。

花と交流のまちづくりを

今では、息子夫婦が経営の中心。わたしは、地域活動に力を入れているのです。地元福釜町で、花を植えたり、ジャンボ力ボチャを作ってコンテストをしたり…。農業に係った地域の資源を題材としたイベントにかかわり、楽しんでいます。イベントなどを通して、子どもからお年寄りまで、人のつながりが広がります。防災対策、子育てに役立つ地域になっ

筆者のつぶやき

現在、市の農業委員としても活躍する石川さん。昨今話題の食育について、こんなお話を聞かせてくれました。「食育＝植育。植物は『水が欲しい』『今が食べごろだよ』というサインを発しています。実際に植物を育てて、それを理解することは、子育てにも通じるのではないでしょうか」



その43

子ども薬師



今月の案内人
糟谷絢一さん(堀内町)



市民の憩いのスポット堀内公園のある堀内町。歴史のまちとしても有名なこの町では、子どもたちを守る薬師如来「子ども薬師」を祭ります。その由来として、200年前の巻物には、こう記されています。「堅谷山堀内院瑠璃光寺の薬師如来と、その昔兵火のために池中へ沈め奉る。それより歳月を経る事、数百年。ある時草刈りの子どもが、藤池の底に沈んでいる薬師如来を見つけ、自分たちの手で拾い上げ、この場所に安置した」 図1参照。



また、子ども薬師にまつわる習慣として、次のような記述もあります。「毎年、霜月(11月)23日に村中の子どもたちが集まって、境内で火をたき通夜するならわしとなっている」 図2参照。



具体的には、子ども薬師が祭られている薬師堂に子どもたちだけで泊まり込むというものです。わたしが子どものころは、小学4年・6年生の男だけが参加。準備も子どもたち自身で行いました。「頭」と呼ばれるリーダーが指示を出します。たき火に使う小枝集めや穴掘りをしたり、お燈明銭というさい銭を集めるため村中を回ったりしました。「おやくしさんの、おとーみよせん」と節のついた掛け声をかけたものです。当日の夜は、2畳ほどの部屋に10人ほどがぎゅぎゅぎゅ詰り。壁から隙間風が入って寒かった記憶があります。でも、お餅や芋を焼いて食べた

り、夜の更けるのも忘れて話をしたりして、楽しい夜を過ごしました。今思えば、そこは学校では学べない

ことを学べる、とても良い道徳教育の場だったのかもしれない。この習慣は、泊まり込みなどの形式を変えつつも、地元子ども会の行事として受け継がれています。この薬師如来が「子ども薬師」と呼ばれているのは、ただ子どもが拾い上げて安置したという由来のみでなく、子どもたちの手で守り続けてきたからといわれています。子どもたちの健やかな成長を祈り、よい村人を育てたいという祖先の念願と結びついた「子ども薬師」。これからも後世に伝え守っていきたくいですね。



子ども薬師

現在祭られている薬師如来像は、後に作られたもの。厨子の中には、子どもが安置したといわれる仏像の膝の部分と思われる木片も保存されている。